なぜ『イリュストラシオン』は労働者の住居問題に言及したのか

五十嵐聡子　博士課程前期１年

はじめに

フランス革命期に多くの新聞やパンフレットが各地で発行され、その影響力の高さを世に示したメディアは、19 世紀に入るとさらに大きく多様に発展した。その多様な新聞の中で本稿では『イリュストラシオン』を取り上げることにする。この新聞の詳細については後述するが、これは高級紙に分類される新聞である。安価な大衆紙が徐々に主流化する当時のメディア事情と相反する新聞であるが、国内、海外事情に関しての豊富な情報と緻密な挿絵を売りに、およそ 1 世紀にわたって続く新聞となった。高額な購読料からもわかる通り、購読者は一部のブルジョワに限られるが、その提供する記事は国政や戦争という政治的なものだけでなく、産業、風習、演劇、美術、服装、家具の様式などあらゆる話題を取り扱った。

こうした高級紙『イリュストラシオン』が、ブルジョワの読者には一見無縁に見える労働者の住居問題の特集を 1849 年に組んでいる。この記事は 1849 年 3 月 31 日付の新聞に創設メンバーの一人であるアドルフ・ジョアンヌの署名入りで書かれたもので、[1] 労働者が劣悪な住環境に置かれている実情について報告書を引用しながら改革の必要性を訴えている。『イリュストラシオン』は大衆紙ではないためこのような労働者の話題を扱うことは非常に珍しいが、当該の号の 4 ページを使用し、力を入れたと言ってよい分量の特集になっている。この論文では、なぜ『イリュストラシオン』がここまで労働者の住居問題に言及することになったのか、について論じていくこととする。

第 1 章　『イリュストラシオン』とはどのような新聞か

まずこの章では本稿で使用する『イリュストラシオン』という新聞がどのような新聞であったかを、19 世紀のメディア事情と共に整理していこう。

フランスでは新聞をはじめとするメディアが 18 世紀末の革命期に爆発的に増加した。革命という政治的事件において大きな影響力を持つことになった新聞の発達はその流れを受け継ぎ、19 世紀に入ると多様な定期刊行物が

創刊され、その発行部数も年々増加した[2)]。つまり新聞が人々にとって世間のあらゆる情報に触れることのできる媒体になった。さらに人の移動や物流の拡大をもたらした交通網の発達や都市の近代化により人々の関心が高まったなど様々な要因が重なり、新聞は一部のエリート層や富裕層が読むだけでなく民衆も日常的に触れることのできるものとなった。

『イリュストラシオン』は 19 世紀から 20 世紀まで約 1 世紀にわたり延べ 5293 号発行されたフランスで最初の挿絵入り週刊新聞である。この新聞は 1842 年にイギリスで発行された『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』の影響を受けたもので、1843 年 3 月 4 日、週刊新聞としてシャルトン（Éduard Charton）、ポーラン（Jean-Bapiste-Alexandre Paulin）、デュボセット（Jacques-Julien Dubochet）、ジョアンヌ（Adolphe Joanne）の 4 人の共和派のジャーナリスト達により生み出された。彼らはみな弁護士や政治家を経てこの新聞を創刊する。本稿で使用している記事の執筆者であるジョアンヌはフランス初の旅行ガイドを作り上げた人物でもあった。

この新聞の大きな特徴の一つとして購読料が挙げられる。1 部あたり 75 サンチーム[3)]、年間の予約購読料は 30 フランと人々が気軽に読むには少々高額であった[4)]。この原因にはこの時代にまだ広告という購読料を下げるための手段は一般的ではなかったこと、そして新聞に対する税金も高額であったことが挙げられる。ただ、『イリュストラシオン』はその情報のオリジナル性と多様さでは他に引けを取らない新聞であった。19 世紀には広く一般に世間のニュースを伝える現在の新聞のスタイルが登場したが、『イリュストラシオン』は国内のニュースにとどまらず、ヨーロッパやアフリカ、アメリカ、アジアに至るまでのあらゆる情報を提供した。それも各地に特派員を送り詳細な情報を逐一報道していたのである。特に文化的な情報、例えば植民地の文化や国内の芸術やファッションに関する記事を取り上げることが多かった。『イリュストラシオン』は 19 世紀において、ブルジョワ中心ではあるが、人々に広く多様なニュースを届ける新聞だったのである。

第２章　記事の背景

ジョアンヌは記事をこう書き始めている。

> 六月蜂起の数日後、臨時政府の首席となったカヴェニャック将軍[5]は、道徳・政治科学アカデミー[6]に対して、さまざまな種類の印刷物によって攻撃されている社会の諸原則を擁護するために、政府に協力することを要請した。その通達において将軍はこう述べていた。「武力によって物理的な秩序を再建するだけでは十分でない、と私は強く思っている。正しい思想の助けを借りて道徳的秩序を再建しなければならない。人びとを啓蒙することによって、その心を鎮める必要がある」と。

カヴェニャックのこの呼びかけに応えて、道徳・政治科学アカデミーの会員のひとりで経済学者のブランキ[7]が各地の工業都市に視察に赴き、1848年12月のアカデミーの会合で報告書を読み上げた。ジョアンヌの記事はこの報告書に基づいているのである。

ではなぜこのような調査に至ったのだろうか。この章では記事が掲載された時期から遡って、1830年からの政治体制の移り変わりとフランスの社会状況を整理していこう。

1830年にオルレアン家のルイ・フィリップによる七月王政が始まる。始まりは王政復古を打倒したフランス革命以来の大規模な革命となった七月革命であるが、担い手はブルジョワジーと民衆であった。しかし、七月王政が開始すると民衆ではなくブルジョワジー、中でも金融ブルジョワが力を持つようになり、労働者は完全に政治的な場から追い払われてしまった。さらに誕生した内閣は革命運動に対して反発的な「抵抗派」[8]によって組閣されたのであった。好景気の影響もあり、その後15年ほど体制は継続するが、45年に始まる食糧危機をきっかけに再び中小ブルジョワや労働者が反乱を起こし、少しずつ揺らいでいく。

そうして七月王政が終わりを迎えることになるのは1848年2月22日に始まった二月革命である。きっかけは労働者が多く住むパリ12区で開催が

予定されていた改革宴会を政府が禁止し、主催者側も衝突を恐れて開催を取りやめたことだった。この判断に急進派の学生や共和派の活動家らが抗議し、治安部隊と衝突した上、下院の開かれていたブルボン宮を取り囲んだ。翌日には市内各所でバリケードが設置されるだけでなく、街路の石畳がはがされたり、商店や馬車が襲撃されたりと街の治安は一気に悪化した。さらにその夜に起こったデモ隊と正規軍の衝突で多数の死傷者が出るとこの蜂起はますます激化し、民衆はついに市庁舎やチュイルリー宮を占拠する。これによりルイ・フィリップは退位し、七月王政は瓦解することとなった。

このような混乱をもたらした労働者を、支配階級であるブルジョワジーは「危険な存在」として認識するようになる。いつ失業するかもわからないその不安定さを野蛮な未開人と同様な状態であるとみなした。ブルジョワジーにとって労働者は犯罪をする者たちとほぼ同類として見られていたのである。

そんな中で 2 月 25 日に共和政の臨時政府が成立する。この政府に対して七月王政でないがしろにされていた労働者たちは圧力をかけ、社会主義者のルイ・ブランと機械工のアルベールが加わることになった。さらに政府は失業により貧困に苦しむ労働者を救済する目的で国立作業場を設立、労働者のための政府委員会「リュクサンブール委員会」の設立も承認した。労働時間を短縮する法律や労働下請け制の廃止を決定するなど労働者の保護を試みたのである。多くの都市労働者の支持を得たと満を持して 4 月に議会は男子普通選挙を行うが、その予想に反して、社会主義議員や労働者寄りの急進的な共和派は大敗する結果となった。

すると政府は 6 月に労働者の受け入れ先となっていた国立作業場の封鎖を決定する。この決定に憤慨した労働者たちは、22 日夜、パンテオン広場に結集し、「パンか、銃弾か！自由か、死か！」と叫びながら、パリ東部一帯に巨大なバリケードを築いた（図 1）。これに対して政府はバリケードや民家に直接砲撃するなど徹底的な武力鎮圧を行い、反乱側は 4000 人もの死者を出し大敗した。この蜂起はフランス社会全体に深い傷跡を残す結果をもたらした。『イリュストラシオン』にも弾圧のすさまじさを物語る挿絵が

掲載されている。そのひとつが、労働者街に向けての砲撃を描いた図 2 である。そしてこの頃から共和派の特に穏健派は社会の防衛と秩序の維持を最大の課題とするようになる。

第 3 章　労働者の住宅問題

道徳・政治科学アカデミーのメンバーであるブランキはカヴェニャック将軍の指示の下、労働者の現状を調べるため、工業で発展の途上にあった北フランスへと向かうことになった。そこで彼が目にしたのは彼らが劣悪な住居での暮らしを余儀なくされている現実であった。ブランキはこれを工業都市において最も脆弱な部分であると指摘している。

19 世紀以前から、都市には貧しい人びとが居住する街区が形成されていた。メルシエの『タブロード・パリ』にも貧困層の住居について次のような記述がある。

> 一家全員がたったひとつの部屋に住んでいる。四方の壁がむき出しで、おんぼろベッドにはカーテンもなく、台所道具が便器といっしょに転がっている。（中略）三月ごとに住民は穴ぐらを変えるが、それは家賃をためて追い出されるからである。

19 世紀にはいると今度はイギリスに始まる産業革命により工業都市がさらに発展し、それに伴い多くの人々が仕事を求めて農村から都市に吸い寄せられる形で流入し、都市の中心部は労働者であふれかえった。都市労働者の急増によってインフラ整備も追いつかなったため、人々が暮らすため必要不可欠な都市機能が麻痺してしまった。すると貧困に加えて住居数の不足による不衛生な労働者住居も出てくる。実際、パリの人口は 1801 年の 54 万 7756 人から 1851 年の 105 万 3261 人と 50 年間で倍増した[9)]。この急激な人口増加の速度は街のインフラ整備の速度を超えていたのである。多くの労働者は人間らしい生活とはかけ離れた劣悪な住居での生活を余儀なくされていた。

この問題に対して行政がなにか対策を講じようとしていたかというと、そうではない。なぜなら復古王政下や七月王政下では高級住宅地の整備と鉄道をはじめとした交通網の整備が加速するだけであり、それに伴って労働者の多く住む地区は取り壊しの対象となった。それにより労働者はパリ郊外の地区へと移動してより不衛生な環境に置かれるなど、上流階級に支持された政府は労働者住居の改善に決して前向きとは言えなかったからである。復古王政では貴族、七月王政では金融ブルジョワをはじめとする大ブルジョワから成る支持基盤を優遇するために、労働者がどのような状況に置かれているかを知ろうとすらしなかったのである。

ただ、この記事が書かれた 1849 年までにこの問題に対して改善運動がなかったわけではない。例えばフーリエの思想は労働者住居の建設に大きな影響を及ぼした。実際に彼の思想を基に実業家ジャン＝バティスト・ゴダンによって建設されたファミリステールは家族ごとの居住スペースと住民たちの共有スペースが存在する共同体的な住居空間を労働者にもたらした。しかし、フーリエの主張は社会主義の観点からなされたものであり、それに賛同することは社会主義を支持することであると非難の対象にもなった。非難の中には、労働者住居が持つ共同スペースが集会の場となり住民が社会主義思想に扇動されるのではないかと危険視するものまであった。

こうした中で、『イリュストラシオン』が労働者住居の問題を取り上げたのである。このような社会の「負」の部分について本来高級紙はなかなか触れることのない話題ではないだろうか。つまり今回取り上げる記事は『イリュストラシオン』にとって「異色の」記事である。

まず『イリュストラシオン』が引用したブランキのレポートで明らかにされた住居の様子について述べていこう。彼は最初に向かった北フランスの都市、ルーアンの住居の様子を以下のように述べている。

> 通路には汚水や汚物が堆積して悪臭を放っている。それらは、あちこちの部屋から投げ捨てられたもので、舗装されていない袋小路に溜まっている。螺旋状の階段は、固まったゴミのせいで、でこぼこしている。手すりも明かりもないその階段を昇った先には、天井の低い薄

暗い小部屋がある。建て付けが悪く、戸はぴったりと閉まらない。家具や生活用品はほとんどない。この部屋に住む不幸な人たちの集まる場所は、ぺちゃんこになった藁が敷かれ、寝床にもなっている。ただし、シーツも毛布もない。食事で使うのは木鉢、あるいは他のいろいろな用途にも利用する縁の欠けた陶器である。

またリールを訪れると、ブランキは言葉にすることもはばかられるような光景を目にした。日の光もろくに入らないような地下に住居があり、ルーアンよりもひどい巣窟のような所に人々が住んでいた。その日の食事にも困るほどで、男たちは家に帰らず酒におぼれ、女性たちは食糧探しを生業としていた。そして子供たちは幼いうちに病気にかかり、ほとんどが死に至り、不衛生な労働者住居は家庭の崩壊をおこしていた。

そして皮肉なことに同日に立ち寄った近郊の刑務所では宮殿かと勘違いしてしまうほどに清潔な環境が整えられ、囚人は健康的な生活を送っていた。つまり、労働者にとっては罪を犯せば公的な支援の下で人間的な生活を保障してもらえる、劣悪な住環境から脱するために秩序を乱すようなことも厭わないような状況に陥っていた、とブランキの報告書は述べるのである。

続けて、この記事の執筆者であるジョアンヌはブランキのこの調査に基づき、読者に対して次のように訴えている。

間違えないで欲しいのは、私たちが意に反して信じざるをえないこれらの事実を、われわれフランス人に明らかにしたのは、社会主義の新聞ではなく、先頃閉会した議会のもっとも保守的な議員のひとり（ブランキのこと－注：五十嵐）であり、ほかならぬ道徳・政治科学アカデミーだということである。これらの事実は否定しえない。この先もそうである。災いあれ！これらの事実を知らされてもなお浅慮かつ愚かに「なすべきことは何もない」と主張するすべての政治家たちに災いあれ！正統王朝、立憲君主政、民主主義的共和政、社会主義的共和政、いかなる政治体制であっても、このような現状の社会を再建する

ことができなければ、フランスでは長続きする政府は設立されないのである。……フランスが最終的にはどのような政体を採ろうとも、自滅したくなければフランスが解決を迫られているこの恐るべき問題の解決方法をここで探すのは、本紙の役目ではないことは分かっている。今世紀のもっとも卓越した思想家たちですら、それをいまだに見つけられていないのだから。私たちはただ、ブランキ氏や道徳・政治科学アカデミーとともに弊害を指摘し、望ましくそして望まれている特効薬ができるまでの間、弥縫策のひとつに人びとが注目してほしいと望むだけなのである。弊害を根本的に除去することはできないにしても、少なくともこの恐ろしい状況を和らげるのに適切な方策であろう。何よりも重要なのは、もっとも貧しく困った状態におかれている労働者階級に健康的な住居を与えることなのである。

そしてジョアンヌは自身の見解の支えとして、以下のようにブランキの言葉を引用している。

このことは、まだよく理解されていないのだが、劣悪な住居がもたらす悪影響を根絶すれば、数々の利点を得られるのである。劣悪な住居こそが、家族の崩壊とそれに続くあらゆる不幸が始まる元なのだ。……私は細心の注意を払って、多くの労働者の私生活を調べた。彼らの住居が不衛生であることが、すべての不幸、すべての悪徳、すべての災禍の出発点であると主張してもよい、と私は考えている。この改革以上に、人類愛からの思いやりと献身に値する改革はない。住居の改革からこそ、始めなければならない。その他の改革は、この改革から自然に生じてくる。住居改革なくしては、他のすべての改革は役に立たないか、不十分であろう。

以上のように『イリュストラシオン』はブランキのレポートを基にして労働者が不衛生な住居に置かれていることを読者に明らかにした。そしてその住居は劣悪な家庭環境と異常な精神状態をもたらし、労働者のあるべ

き人間的な生活を奪っている。それこそがあらゆる混乱をもたらす諸悪の根源である。つまりこれはフランスのために社会のあらゆる垣根を越えて解決しなければならない問題なのだ、と呼びかけたのである。

おわりに

本稿では『イリュストラシオン』はなぜ労働者の住居問題に言及したのかについて、新聞の性質や当時の社会情勢から考察した。ジョアンヌによれば、この混乱した社会の根源になっているのは労働者階級なのではなく、彼らがおかれている不衛生な住居である。つまり労働者を危険な存在として排斥するのではなく、健康的な住居を彼らにもたらすことである。そのことこそがフランスの秩序と日々の生活の安寧につながるのだ、と革命や蜂起が再び起こることを警戒する読者たちに理解をうながそうとしたのである。労働者の住居については社会主義的な立場からその改善を求める動きがあったことは、すでに述べたように、事実であるが、穏健共和派に近いと思われる新聞『イリュストラシオン』でも六月蜂起後に労働者の住居改善を求める記事を発行していたのである。

19 世紀の後半になると官民問わず様々な労働者向けの住居がフランス各地で建設される。パリでは 1851 年、モンマルトルに単身者用の労働者住宅「シテ・ナポレオン」が完成する（図 3)。これはブランキが求めた健康的な生活を送ることのできる環境が整えられた住居であり、完成式を報じた『イリュストラシオン』の記事[10] では以下のように述べている。

> 労働者階級に利益をもたらすために設立された新しい施設が計画通りに機能を果たしているのを見ると、多くの偏見は消え去るであろう。そして、すべての善良な人びとは、節度をもって適用される協同の原理というものがたんなる空想ではなく、実現可能なものであることを認めるであろう。

『イリュストラシオン』は、労働者に衛生的な住居を提供することによっ

て、彼らが社会に対して危険な存在であるというブルジョワジーの思い込みを払拭することが可能となり、社会に安寧をもたらすと主張した。労働者への住宅供給という政策は、19 世紀末まで続くが、この社会的な政策の本格的な始まりに際して『イリュストラシオン』の記事が人々に影響を与えたのかもしれない。

注

1） Adolphe Joanne, “Des logements des classes ouvrières”, *L’Illustration*, 31 Mars 1849.

2） 日刊紙の合計部数の変化ではあるが、パリだけで 1803 年～70 年の間で約 30 倍になった。

3） 鹿島茂『19 世紀パリ・イマジネール　馬車が買いたい！』によれば、サンチームは 1803 年の通貨改革で導入されたフランの補助通貨の呼称である。1840 年の時点で肉体労働者の平均時間給が 4 スー、パン 1 キロ当たりの値段が約 8 スーであった。このスーという単位は旧体制下の通貨であるリーブルの補助通貨で、19 世紀にも民衆生活に根強く残っていた。1 スー＝5 サンチームの価値があったので、この場合、1840 年の肉体労働者の平均時間給は 20 サンチーム、パン 1 キロは 40 サンチームであった。

4）『イリュストラシオン』（以下 IL）と同じような週刊紙『ル・モンド・イリュストレ』（1857-）（以下 MI）と比較すると、1 号あたりは倍の価格である。（IL → 75 サンチーム、MI → 30 サンチーム）さらに『イリュストラシオン』の年間購読料は 57 年になると 36 フランに値上がりしておりこちらも倍の価格である。（IL → 36 フラン、MI → 18 フラン）

5） ルイ・ウジェーヌ・カヴェニャック（Louis Eugène Cavaignac）六月蜂起の時に陸軍大臣から行政長官となり、蜂起の鎮圧にあたった。1848 年 12 月の大統領選挙に立候補したが、ルイ＝ナポレオン（後の皇帝ナポレオン 3 世）に敗れた。

6） 1795 年に設立された学士院のひとつ。各分野のエリートが集結し、政府への助言をすることもある。

7） Jérôme-Adolphe Blanqui　フランスの経済学者。弟は革命家のオギュースト・ブランキであるが、彼自身は自由貿易を支持するような人物であった。

8） 七月王政成立後二つに分裂したオルレアン派のうちの一つ。革命運動の進展を阻止し、七月革命はあくまでシャルル 10 世のクーデターへの防衛措置であり、合法的な王朝の交代であったと主張した。

9） ルイ・シュヴァリエ著、喜安朗訳『労働階級と危険な階級』みすず書房、

1993 pp. 175〜180.

10） “Histoire de la semaine”, *L'ILLUSTRATION*, 22 Novembre 1851.

参考文献

ルイ・セバスチャン・メルシエ、原宏編訳『十八世紀パリ生活誌（上）』、岩波書店、1989.

佐々木真『図説　フランスの歴史』、河出書房新社、2011.

中野隆生『プラーグ街の住民たち　フランス近代の住宅・民衆・国家』、山川出版社、1999.

ピエール・アルベール、斎藤かぐみ訳『新聞・雑誌の歴史』、白水社、2020.

木下賢一「フランスの挿絵入り新聞『イリュストラシオン』のコレクションについて」、明治大学図書館紀要『図書の譜』、第 12 号、2008 年、pp. 178-183.

大森弘喜『フランス公衆衛生史―19 世紀パリの疫病と住環境―』、学術出版会、2014.

小倉孝誠『19 世紀フランス　夢と創造―挿絵入新聞『イリュストラシオン』にたどる』、人文書院、1995 年.

鹿島茂『馬車が買いたい！19 世紀パリ・イマジネール』、白水社、1990.

喜安朗・川北稔『大都市の誕生　ロンドンとパリの社会史』、筑摩書房、2018.

上垣豊「第 10 章　立憲王政」、柴田三千雄、樺山紘一、福井憲彦編著『世界歴史体系　フランス史 2 ―16 世紀〜19 世紀なかば―』、山川出版社、1996.

木下賢一「第 2 章　第二共和政と第二帝政」、柴田三千雄、樺山紘一、福井憲彦編著『世界歴史体系　フランス史 3―19 世紀なかば〜現在―』、山川出版社、1995.

谷川稔「第 6 章　近代国民国家への道」、福井憲彦編著『新版　世界各国史 12 フランス史』、山川出版社、2001.

使用した図版

図 1、図 2

“Insurrection de Juin 1848”, *L'ILLUSTRATION*, 8 Juillet 1848.

図 3

“Histoire de la semaine”, *L'ILLUSTRATION*, 22 Novembre 1851.

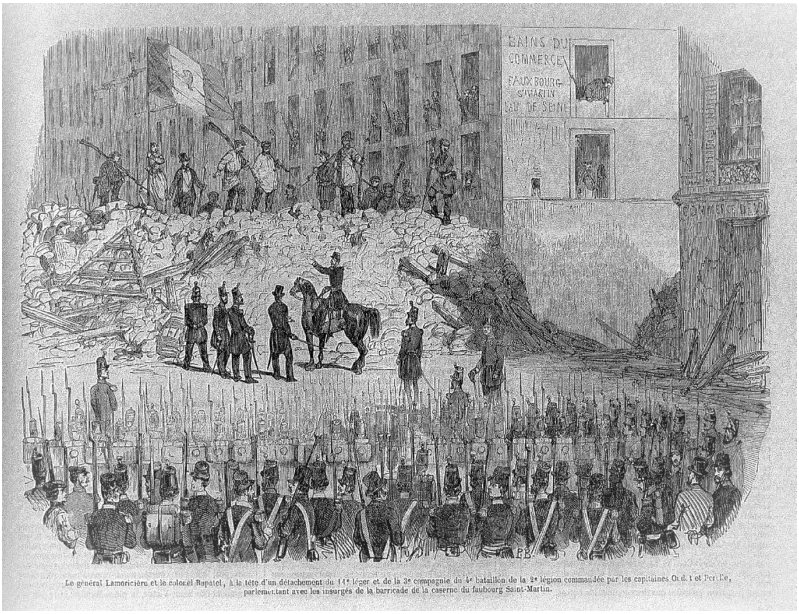


図１　六月蜂起でのバリケード（労働者が多く住むフォーブール・サン・タントワーヌにて）

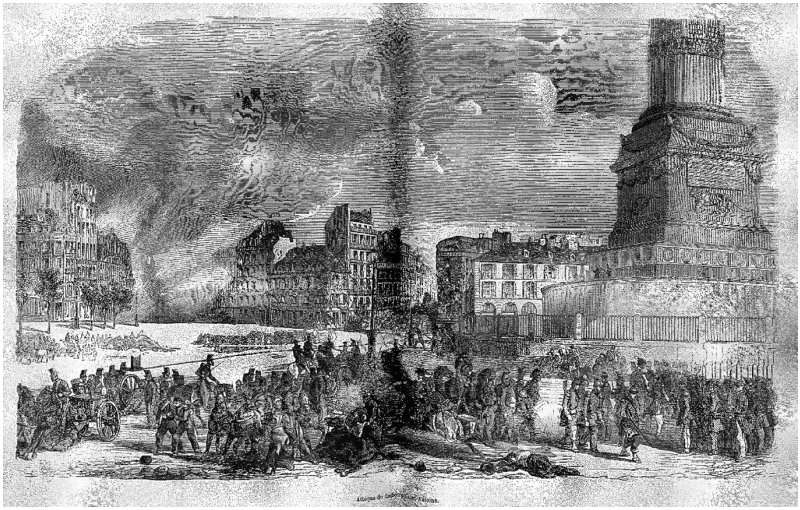
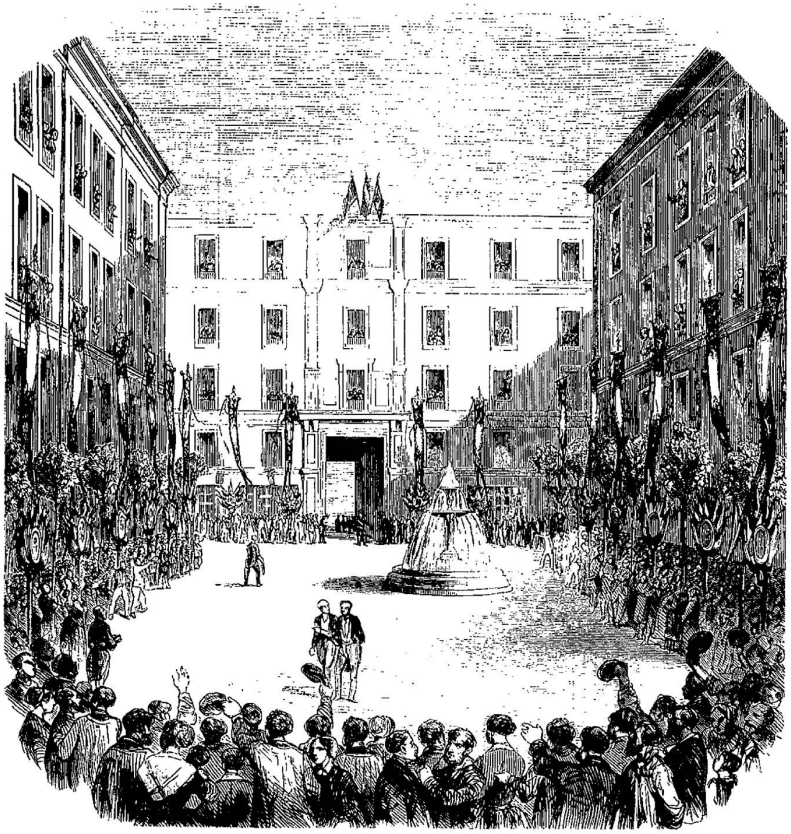


図２　政府側からフォーブール・サン・タントワーヌにむけて砲撃



Inauguration de la cité ouvrière de la rue Rochechouart."

図 3　シテ・ナポレオン完成式の様子